

42年卒同期会報告（2006年2月5日開催）・・・同7日WHCメーリングリスト投稿文

皆様へ

Prof. 西海はさすがだと感服しました。開催当日の同期会の写真がその日の深夜にもう掲載されたのですから。

そのメール文中に「詳しくは、幹事から報告があると思いますので・・・」とあり、あっそうか、これもお世話役の仕事だったかと思い直して、「一本の電話(WHC42会開催経過)」と題したワードファイルを添付しました。どうぞ、ご高覧、ご笑読ください。

「一本の電話」 (WHC42会開催経過)

五十嵐

始まりは、秋晴れの日の朝、自宅にかかってきた一本の電話だった。05年11月の第二日曜日、朝食を終えてコーヒーを淹れようと思っていた時にベルが鳴った。

「もしもし」

「五十嵐さんですか？」 明るい女性の声。女性からの電話は妻の知人か、何かのセールスに決まっている。

「はい、そうですが」 答えながら、私の目は電話を代わるべき妻を探していた。

「まとうです」 急に心が華やぐのが自分でも分かった。

「おー、久しぶりー、どうしたの、何かあったの」

用件は概ね次のようなものであった。

「この前、同期の女の子5人で集まったら、会えるうちに会っておきたいね、っていうことになったの。同期会をやりたいけれどどうかしら？ 男の人とは連絡つく？ 男性陣の取りまとめをしてくれないかしら？」

短い会話の後、メールアドレスの確認をして電話を切った。

* * *

ここでいくつかの注釈をしておかなければならない。まず「まとう」さんとはWHC同期の日向寺さんのことだ。糸へんに果、「裸」と書いて「まとう」と読む珍しい姓だ。衣へんに果なら裸（はだか）だが、なぜ衣が裸で、糸がまとうになるのか、糸より衣のほうが身体を隠すと思うが、不思議だ。次に、還暦を過ぎた自分達のことを本当に「同期の女の子」と言ったかどうか。これは電話で5人と聞いて、WHC時代のそれぞれの顔や姿を思い浮かべながら電話を続けた私の淡いノスタルジアによる聞き違いのように思うが確認はしていない。三つ目、「会えるうちに会っておきたいね」とは美しい表現だが、実際の会話は次のようなものだったらしい。「男の人たち、みんな元気かしら」「まだみんな生きてるんじゃない」「生きてるうちに会っておきたいわね」「そうね、それに、お互いに誰だか分からないようになっ

てからじゃ遅いもんね」「そう、そう」。四つ目、「同期会をやりたい」、

42年卒の同期会は、卒業してから39年になる今まで記憶になかった。もっとも地方巡業の多かった私が外されていれば別だが。五つ目、「男の人との連絡」には「つくと思うよ」と答えた。西海の尽力でメーリングリストが維持されて、6月に理工系の人には会っていたし、文系の何人かとは大竹の呼びかけで9月に会ったばかりだった。最後に、「男性陣の取りまとめ」と確かに聞いたが、その日の午後届いた萩原（柳）さんを連名受取人とするEメールの内容は「萩原さん 先日のお話で出たように、五十嵐さんに同期会開催をお願いしました。早くみんなに会いたいね！ 五十嵐さん ではよろしくお願ひします」というもので、否も応もなかった。

* * *

「いつ」 早めに連絡をしてみんなの日程を空けておいてもらおうということで、2ヶ月以上先の2月5日（日）に決めて、とりあえず第一報のご案内を出した。

「どこで…その1」 第一報の案内では、場所を縲案の「新宿のどこか」とした。第一候補にした新宿西口高層ビルの40階にある中華料理店を事前に偵察しようと、12月初めの平日昼、現地に集合した。私と2人だけでは危ないかもと察したらしい縲さんが小関（唐木）さんと待っていた。豪華ランチを食べた後、係りの人を呼んで日時を言うと「少々お待ちください」、何かを調べる様子が変わって「申し訳ありません。その日は年に2回のビル全体の点検日でございます、当店も休ませていただいております」。急ぎ隣のビルの同じ40階の中華料理店に駆け込んで趣旨を告げると、全く同じ答えが返ってきた。オイオイ、2月5日はこの辺一帯のビルが真っ暗になるらしいぞ。

「どこで…その2」 その日の場所探しは中断し、再びパソコンに、「新宿」「宴会」「5～7000円」などのキーワードを入れて検索すると、「新宿西口、クラス会・同期会コース、4時間利用サービス」という店が浮かび、早速入れたメールに丁寧な返事があって、「どこで」が決まった。

「だれが」 続々と入ってくるEメールやFAXは、ほとんどが懐かしさの一言を添えた「出席」という回答で、欠席の人からは、いかにも残念というメッセージが届いた。1月に入ってから「17名の参加申込みがあり 云々」との最終案内を出した後の反応は、「すごい参加率ね」「同期ってこんなに大勢いたかな」「みんな会いたかったんだよ」等々。最終的に連絡のついた20名のうち、16名が出席した。

「どうした」 この類いの集まりがいつもそうであるように、久しぶりに会った人は、相手の顔と自分の頭の中の記憶をつなぎ合わせようと、まずは必死になる。しかしそれもわずかな時間のことであって、すぐに、あの頃の「おれ、おまえ」「あなた、わたし」同士になる。会の冒頭に「この場所で4時間」と言ったときの「えーっ」という反応は「そんなに長い」という響きがあった。でもその時間で足りなかったことは、続きの会場となった喫茶店に大半の人が流れ込んだことでも明らかであった。

* * *

50歳前後から、小学校から大学までのクラス会や同期会が再開されるようになった。海外や地方へ行っていた人たちが終の棲家へ帰って来る、名刺の肩書きが気にならなくなる、若い頃の恩讐や愛憎も今や超えられるなど様々な要因が皆を集まり易くするようだ。これもこの類いの集まりがそうであるように、ン10年ぶりかの再会の後は、2、3年に1回開こうとか、その間にも会おうとかいうことになる。この42会も、他の年次の方が比較的良好に集まっていると聞くのに比べると、再会（再開）までの期間は長かったが、これからの頻度は多くなるに違いない。

* * *

再会のお手伝いを一応果たした今、ふっと思うことがある。秋晴れの日の朝にかかってきた「一本の電話」、それは心のどこかで私が待っていた電話だったのではないだろうか、と。

縹さんありがとう、昔の女の子たちありがとう。

